

阿武隈川流域の縄文時代墓制の変遷

The Transition of Grave System in the Jomon Period at the Abukuma River Basin

安田 楓加 YASUDA Fuka

要 旨

東北地方では、土器棺墓は一般的に子供の墓と考えられているが、福島県福島市宮畑遺跡のように、土器棺墓のみが検出される状況は不自然である。本研究では、土器棺墓と配石墓の両方が検出される越田和遺跡と西方前遺跡を対象に、土器棺墓の中に成人の再葬墓が含まれている可能性を検討した。

検討の結果、大木9式から綱取I式古段階までの土器棺墓はほとんどが横位に設置され、この時期の土器棺墓は子供用の土器棺墓の可能性も成人の再葬墓の可能性もあるとわかった。綱取I式新段階で出現する配石墓は成人用の墓と考えられるため、この時期の土器棺墓は子供用だと考えられる。続く綱取II式では配石墓及び土坑墓が検出されない一方で、設置方向の異なる土器棺墓が多数検出される。従って、土器の容量に制限のある横位の土器棺墓が子供用、土器の容量以上のものが入る正位の土器棺墓が成人用の再葬墓である可能性を指摘した。

キーワード: 墓制 配石墓 土器棺墓 再葬墓

1. 本論の目的

一般的に、縄文時代の土器棺墓は子供用の墓、もしくは胎盤を入れていたとされることが多い。東北地方の屋外土器埋設遺構もまた、子供用の墓であるとされている(佐々木1975など)。

そのため、福島県福島市宮畑遺跡のように、土器棺墓のみ検出される状況は不自然である。このことから、土器棺墓の中に成人の再葬墓が含まれている可能性があるのではないかと考えた。

一方、阿武隈川の支流の大滝根川流域に位置する福島県三春町の越田和遺跡と西方前遺跡では、縄文時代後期前葉に配石墓と土器棺墓が共存する。配石墓は成人の墓だと考えられるため、配石墓が検出されない時期の土器棺墓の中に成人の再葬墓が含まれる可能性を検討する。

本研究では、配石墓と土器棺墓の検出例の多い越田和遺跡と西方前遺跡を対象に、①配石墓の遺跡化過程、②土器棺墓の編年、③埋設方向の分類を当該地域の葬墓制の基礎的事項の整理として行った上で、配石墓と土器棺墓の時期ごとの割合の変化から、単葬、複葬も含めた縄文時代中期末葉から後期前葉の葬墓制の変化を明らかにする。

2. 分析対象と本論の構成

2-1. 分析対象

三春ダムは阿武隈川の治水事業の一環として、阿武隈川の支流である大滝根川に建設された。大滝根川は阿武隈高地のほぼ中央に位置する大滝根山麓から西流し、郡山市街の南東端で阿武隈川に流入している全長51kmの小河川である。越田和遺跡と西方前遺跡はこの三春ダム建設に伴い、発掘調査が実施された。

越田和遺跡は縄文時代早期から後期、律令時代に渡って営まれた集落遺跡である。縄文時代中期から後期の配石墓が8基、土器棺墓が18基検出されている。西方前遺跡は縄文時代中期から後期に渡って営まれた遺跡であり、配石墓は10基、土器棺墓は47基検出されている。

2-2. 本論の構成

まず、配石墓が本当に成人用の墓であるかを確かめるために、配石墓の墓坑内の容積を調べた。その結果、墓坑内の容積に差があることがわかり、これは土坑内の木棺の有無によるものと仮定した。このことから、木棺の有無を判断するための方法論を提示し、検証した。

次に、土器棺墓の編年と設置方向を調べた。横位は土器の容量に制限があるが正位には土器の容量以上のものが入る。そのため横位は子供用の墓であり、正位は成人用の墓であると判断した。

最後に、土器の編年と配石墓の時期ごとの比率を整理し、配石墓のない時期の土器棺墓が成人の再葬墓だと指摘した。

3. 配石墓

3-1. 配石墓研究の概要と分析対象遺跡の配石墓の分類

墓坑内の堆積の分析では、山本一郎(1989)が土坑の堆積状況によって墓坑と貯蔵穴のどちらに近いかの状況証拠となる①単一堆積、②水平堆積、③斜堆積、④放射線型凹堆積、⑤船底型凹堆積、⑥凸堆積という6つの判断基準を作った(図3)。

山本は墓坑に多い例として①単一堆積、⑤船底型凹堆積をあげている(山本 1989)。単一堆積とは、墓坑内の層が別れないものを指す。山本は、単一堆積は墓坑に多く見られ、貯蔵穴のような深い堅穴にも散見されたとした。また、墓坑の単一埋葬は間違いなく埋め戻しであると述べた。

船底型凹堆積とは、墓坑を断面図で見た際、上部の層の中央が下部に沈み込むように陥没し、下部の層が「凹」の字を示すものである。さらに、沈み込んだ上部の層の左右どちらかだけが「凹」の字になる状態も船底型凹堆積であるとした。山本は、船底型凹堆積は遺骸の腐敗消滅に伴う陥没の結果であり、土坑断面図が船底型凹堆積を示す場合、木棺の存在した可能性が高いとしている。

福島県域の配石墓は、大竹憲治(2018)が、墓坑側石に全周する石棺風のタイプを「関東・中部型配石墓」、配石下墓坑に側石が伴わないタイプを「阿武隈型配石墓」と仮称した。また、阿部(2019)は円形、楕円形に配される縁石の内側に円礫、亜角礫が配置される配石墓を「西方前型配石墓」と仮称した。

3-2. 船底型凹堆積を示す配石墓における、木棺の有無の判断方法の提示

配石墓が成人の墓であることをたしかめるために、配石墓の容積を調べた。その結果、配石墓の容積は大きいものだと1.01m³、小さいものだと0.11m³と差があることが分かっ

た。また、配石墓の断面には船底型凹堆積と呼ばれる窪みが現れるものがあり、それらは研究史において木棺の痕跡の可能性があるとされている。ここでは、土坑の容積の差は木棺の有無に起因するものと仮定し、木棺の有無を判断する方法論を提示して検証する。

本論の研究対象遺跡には、船底型凹堆積を示す配石墓がある。しかし、同じ遺跡の配石墓でも船底型凹堆積の現れる場所が敷石面と土坑内の2種類に別れる。また、敷石面と土坑内の両方に船底型凹堆積が現れる例もある。

配石遺構の敷石面は程度に差はあるが陥没しているものが多い。これは、埋葬された遺体が腐朽したことで体積が減った分、その上にある層が下方に沈み込んだと考えられる。加えて、越田和遺跡4号配石墓と5号配石墓では墓坑底部から覆土中位にかけて、炭化材が出土している(図5,6)。仮に炭化材が木棺の一部であったとすれば、遺体に加えて、木棺内に空隙が存在したことにより、沈み込みが顕著になったと推定される。

そこで、墓坑全体の容積に対する陥没の容積を、墓坑の「陥没割合」として算出し、算出結果に一定の基準を設けることで木棺の有無を検討する。

陥没部の容積は、楕円形の平面における長軸半径と短軸半径及び最大深度から計算する。推定掘り込み面は、墓坑壁上端を結んだ面とする。また、敷石面最底部は最も沈み込んだ配石の底面とし、推定掘り込み面と敷石面最底部の最短距離を深さとして計算する。墓坑の全体の容積は、墓坑底部と壙口部の規模により算出する。加えて、仮に土坑内に遺体を安置後、全ての掘削土で埋め戻した場合、配石は遺体分の土砂によるマウンド上になされ、掘り込み面より上になるはずである。しかし、当時のマウンドの高さが不明のため便宜的に掘り込み面を基準とする。

越田和遺跡の敷石面に船底型凹堆積が現れる配石墓は3基、西方前遺跡は1基ある。

越田和遺跡も西方前遺跡も、程度に差はあるが敷石面の陥没が確認できる。陥没は、遺体が腐朽したことにより発生したと考えられるが、大きく陥没する配石墓は土坑内に木棺があったことが想定できる。従って土坑容積に対して敷石面がどの程度沈み込むかの割合を明示することにより、木棺の有無を検討することができる。配石面が沈み込んだ容積は楕円体の体積を求める公式

$$V = \frac{4}{3} \times a \times b \times c \times \pi$$

を使用する。沈み込みは楕円体の半分の値なので、

$$V_1 = \frac{1}{2} \times \frac{4}{3} \times a \times b \times c \times \pi$$

となる。墓坑の容積は、円錐台の体積を求める公式

$$V = \frac{\pi b_1 h}{3a_1} (a_1^2 + a_1 a_2 + a_2^2)$$

を使用する。計測箇所は越田和遺跡1、2、3号配石墓を例に図示した(図14)。また、配石墓は全て同じ土層であるので、経年での土の圧縮も同程度として計算では考慮しない。

3-3. 木棺の有無を判断する方法論の検証

越田和遺跡と西方前遺跡の陥没割合の降順を見ると、越田和1、2号配石遺構は共に46%という大きい割合で沈み込んでいることがわかる。この二つの遺構は遺体に加えて木棺があったために陥没割合が大きくなったと考えられる。

西方前遺跡6群A配石墓は西方前遺跡の中で唯一船底型凹堆積があり、38%と大きい割合で陥没する(図13)。しかし越田和1、2号配石墓に比べると陥没割合は小さく、木棺があったとはいえない。

越田和4号配石遺構が5%という少ない結果になったのは、この遺構にはマウンドが残っており、その上に配石が置かれているため、最も敷石が陥没する点で陥没容積を算出すると他の遺構に比べて配石の陥没が少なかったためと考えられる。逆に考えれば、越田和4号配石遺構以外の越田和遺跡の配石遺構にも、マウンドがあった可能性を示している。

西方前遺跡4群A、5群A、B、D、配石墓、6群B、8群A、B配石墓は敷石面の沈み込みがほとんどなく、土坑内に船底型凹堆積も見られないため、木棺は存在しなかったと考えられる(図10、13)。土層は複数に分かれず、単一堆積(山本1989)だと言える。低いマウンドが存在し、遺体が腐敗して陥没したために掘り込み面が平坦になった可能性はあるが、根拠となるような痕跡がないため断言はできない。

以上の結果を踏まえ、陥没割合で木棺の有無を確認した場合、越田和遺跡1、2号配石遺構に木棺があった可能性が高いと判断した(図4)。

西方前遺跡は敷石面の陥没が少ないために陥没割合も小さくなり、船底型凹堆積も6号A配石墓を除いて確認できない。従って、西方前遺跡には木棺のある配石墓は存在しないと判断した。この時期の配石墓で木棺が存在したのは越田和遺跡のみの特徴だと言える(表1、2)。

3-4. 木棺が存在したと判断した配石墓の解釈

越田和1号配石墓と2号配石墓は共に敷石面に船底型凹堆積が現れるが、陥没の形が同じとは言えない。1号配石墓はお椀の底のような形に陥没するが、2号配石墓は四角形のような形で陥没する。陥没深も、1号配石墓は0.74m、2号配石墓は0.66mと差がある。しかし、陥没割合は共に0.46%という結果になった。これらは、土坑短軸方向の長さに差があることが原因だと考えられる。同じ容量のものが収められていても、土坑規模に差があれば陥没の仕方は変わってくる。しかし、陥没の形や陥没深ではなく、陥没割合を用いることで、土坑規模に左右されずに木棺の有無を検討することができた。このような意味でも、陥没割合を用いた配石墓の木棺の有無の判断方法は有用であると考えられる。

船底型凹堆積が敷石面に現れるか中層に現れるかの違いは、遺体の上にどれだけの土が覆っていたかによると考えられる。例えば、土坑内に木棺があれば遺体だけ埋葬した場合に比べると遺体の上を覆う土は少なくなり、木棺を覆う層が陥没することで船底型凹堆積は敷石面に現れやすいと言える。また、木棺があっても高いマウンドがあった場合、木棺の上を覆う土はマウンドがない場合や低い場合よりも多いので、敷石面は陥没せず、平坦または多少のマウンドが残ると考えられる。その場合、船底型凹堆積は中層に現れると言える。木棺のない場合も、遺体の上を覆う土は木棺がある場合よりも多くなるので、船底型凹堆積は中層に現れる。しかし多くの場合は船底型凹堆積が現れずに単一堆積となる。

越田和遺跡4、6号配石墓は船底型凹堆積を示し、かつ炭化材が出土している。これらの遺構は前述した仮説に当てはめると、木棺が小さいために遺体の上を覆う土が多くなったので陥没割合が小さくなったか、マウンドが高く作られたため遺体の上を覆う土が多くなり陥没割合が小さくなったかの二つの理由が考えられる。

越田和遺跡3号配石墓、西方前遺跡6群A配石墓は、敷石面が比較的大きく陥没し、かつ中層に船底型凹堆積が確認できる。2箇所にも陥没の痕跡が現れているため、仮にそれが敷石面の一箇所で行った場合、陥没割合は越田和遺跡1、2号配石墓に届く値を示した可能性もある。しかし、前述したように中層に現れる船底型凹堆積は遺体のみの埋葬の可能性もあるため、炭化材など確実な証拠がないため今回は木棺なしとする。

従って、確実に木棺があると判断した配石墓は越田和遺

跡1、2、4、6号配石墓の4基である。西方前遺跡には木棺があると判断できる配石墓はなかったため、配石墓に木棺を使用するのは越田和遺跡のみの葬制だったと言える。

4. 土器棺墓の実例検証

4-1. 土器棺墓における年齢の判断と分析対象時代の型式編年

山田は子供の埋葬例を集成、検討した(山田1997)。子供の成長段階を5段階に区分し、埋葬形態を分類した上で各地域、時期別にそれぞれの埋葬形態を把握した。その結果、子供の埋葬形態は大人と同じような単独単葬例が最も多く、死産児は土坑に、幼児期以上の早期死亡例は土器棺墓に、多数合葬例は幼児期以降に多いという傾向を明らかにした。

次に、土器編年の研究史についてまとめる。東北地方南部の土縄文時代中期の土器型式は、山内清男による研究により大木緒型式が設定されていた(山内 1937)。

綱取式は福島県いわき市綱取貝塚出土土器を基準に、馬目順一(1968)が設定した土器型式である。馬目は綱取貝塚C地区の出土土器といわき市下片寄貝塚出土土器を比較し綱取Ⅰ式、Ⅱ式の区分を設定した。

4-2. 土器棺墓の型式編年の整理

土器棺墓の編年を整理し、次の段階で行う設置方向の分類、配石墓の時期と合わせて検討することにより、配石墓のない時期の正位の土器棺墓が成人の再葬墓であることを証明することができる。

越田和遺跡では土器棺墓だと考えられる土器埋設遺構が19基確認されている。時期は大木10式から綱取Ⅱ式までの4型式に渡り、綱取Ⅰ式古段階が13基と最も多く検出される。

西方前遺跡では土器棺墓と考えられる土器埋設遺構が27基ある。時期は大木9式古段階から綱取Ⅱ式までの6型式に渡り、越田和遺跡と同様に綱取Ⅰ式が11基と最も多く検出される。

4-3 土器棺墓の設置方向の整理

土器棺墓の設置方向は、土器を通常通りに設置した正位、口縁が下に来るように設置された逆位、土器を横倒しの状態で設置した横位、土器を斜めに設置した斜位に分かれる(図15)。

土器棺墓の設置方向の分類を行い、配石墓の時期と土器

棺墓の編年と合わせて検討する。横位の土器は土坑の大きさの関係上土器の容量以上のものは入らないが、正位や斜位の土器棺墓は土器の容量以上のものを入れることができる。従って、土器の設置方向を分析し、土器の編年と配石墓の時期を合わせて検討することにより、配石墓のない時期の正位の土器棺墓が成人の再葬墓であることという可能性を指摘できる(表3、4)。

西方前遺跡の土器埋設遺構の綱取Ⅱ式土器は正位の土器が4基出土している。この4基の土器は成人の骨が再葬されたと考えられる。同じ時期に検出される斜位の12号土器棺墓は、口縁の3分の1程が土坑掘り込み面から飛び出している。大木9式の9号土器棺墓のように斜位でも口縁部が完全に土坑掘り込み面を向いていれば成人の再葬墓の可能性を指摘できたが、12号土器棺墓は口縁部の過半が壁面を向く。したがって、成人の再葬墓の可能性があるのは正位に埋葬される20、21、22、23号土器棺墓だと判断した。

また、これら4基の土器はまとまった場所から出土している。配石墓が複数のまとまりで構成されていたように、土器棺墓に再葬されるようになってその風習は引き継がれたと考えられる。

5. 配石墓と土器棺墓の比率

5-1. 配石墓と土器棺墓の比率

まず、越田和遺跡では、大木10式期に横位の土器棺墓が1基検出される。綱取Ⅰ式古段階では、横位の土器棺墓が主体となる(横位10基、逆位1基)。綱取Ⅰ式新段階では配石墓が主体となる(配石墓8基、土器棺墓の横位3基)。

西方前遺跡では、大木9式期に正位の土器棺墓が3基検出される。次の大木10式期の主体は横位の土器棺墓である(横位4基、正位1基)。綱取Ⅰ式期古段階でも横位の土器棺墓が主体となる(横位7基、正位3基、斜位1基)。綱取Ⅰ式新段階では配石墓が主体となり、(配石墓10基、横位が2基)。綱取Ⅱ式では正位の土器棺墓が主体となる(正位4基、斜位1基)。

越田和遺跡と西方前遺跡を合わせて確認すると、大木10式は横位が主体で、全体の83%を占める。綱取Ⅰ式期古段階でも横位が主体となり、全体の73%を占める。綱取Ⅰ式新段階では配石墓が78%、横位の土器が21%となり、配石墓が主体となる。綱取Ⅱ式では正位が67%と主体を占める。

このように、土器棺墓と配石墓の変遷を確認したことにより、配石墓のない時期の土器棺墓の中に成人の再葬墓が

含まれる可能性を検討できるようになった。

5-2.墓制の変遷

土器棺墓と配石墓の比率を確認したことにより、検出されている土器棺墓の中に成人の再葬墓が含まれている可能性を検討することができる。

網取Ⅰ式新段階では配石墓が出現する。配石墓は成人用の墓と考えられるため、この時期の土器棺墓は子供用であると考えられる。この時期に検出される土器棺墓5基全てが土器棺墓全体の平均器高を下回っていることから、これらの土器棺墓を子供用だと判断した。

網取Ⅱ式では配石墓が検出されず、土器棺墓のみになる。また、一般的な土坑墓も検出されない。従って、土器の容量に制限のある横位の土器棺墓が子供用、土器の容量以上のものが入る正位の土器棺墓が成人の再葬墓である可能性が高いと判断した(図16)。

6. 結語

今回の研究では、越田和遺跡、西方前遺跡の縄文時代中期末葉から後期にかけての墓制の変遷を明らかにすることができた。加えて、その過程の中で、配石墓の木棺の有無を判断する方法論を提示することもできた。しかし、土器棺墓に成人の再葬墓が含まれているのであれば、必ず一次葬墓が存在するはずである。今回は一次葬墓に言及することができなかったため、今後の課題にしたい。

参考文献

- 財団法人福島県文化財センター 1996 「三春ダム関連遺跡発掘調査報8越田和遺跡(第2分冊)」 福島県教育委員会 財団法人福島県文化財センター 建設省東北地方建設局
- 三春町教育委員会 1992 「西方前遺跡Ⅲ 縄文時代中期末葉から後期前葉の集落跡 本文編」 三春町教育委員会
- 三春町教育委員会 1989 『三春町文化財調査報告書12:西方前遺跡3』三春町教育委員会
- 財団法人福島市振興公社文化財調査室 1994 『福島市埋蔵文化財報告書60:宮畑遺跡発掘調査報告』福島市教育委員会他
- (財)福島市振興公社文化財調査室 1997 『福島市埋蔵文化財報告書109:宮畑遺跡23』(財)福島市振興公社文化財調査室
- 福島雅儀 2012 「阿武隈川流域における縄文時代中期から後期への集落変化 福島県三春町柴原A遺跡と越田和遺跡の発掘

調査から」 国立歴史民族博物館研究報告

縄文時代文化研究会 2019 「縄文時代墓制研究の現段階」

山田康弘 1997 「縄文時代の子供の埋葬」 日本考古学4巻4号

小林達雄 2008 「総覧縄文土器:小林達雄先生古希記念企画」

総覧縄文土器刊行委員会

山本一郎 1989 「土坑埋積類型」 『周陽考古学研究報』第4集、周

陽考古学研究 所

加藤元康 2019 「新潟県における配石墓の沈み込み事例の検討」

『研究紀要』 第10号43-50頁

小林達雄 2008 「総覧縄文土器」 『「総覧縄文土器」刊行委員会』

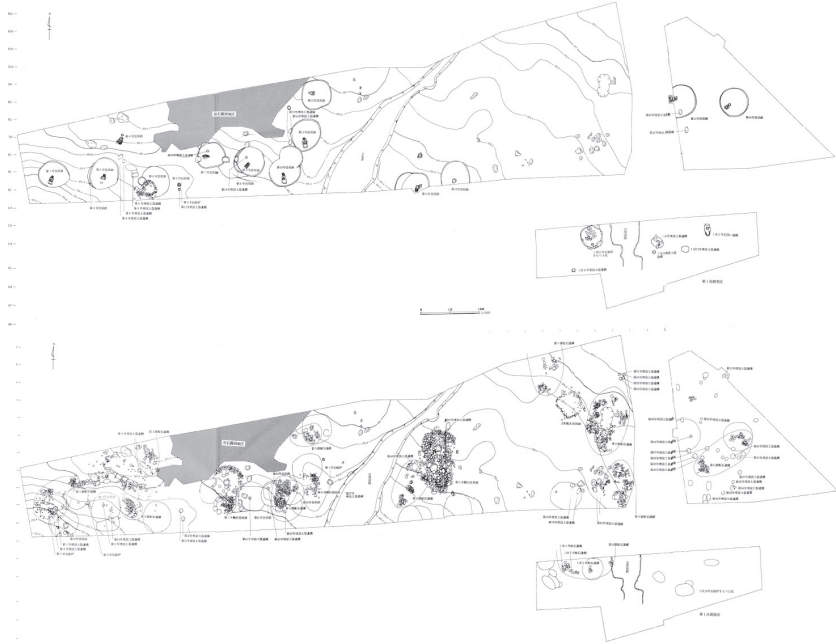


図1 西方前遺跡の遺構配置図

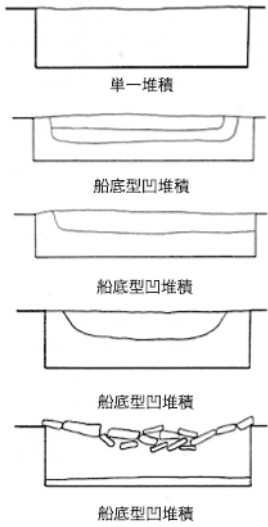


図3 堆積に分類
山本(1989)より転載

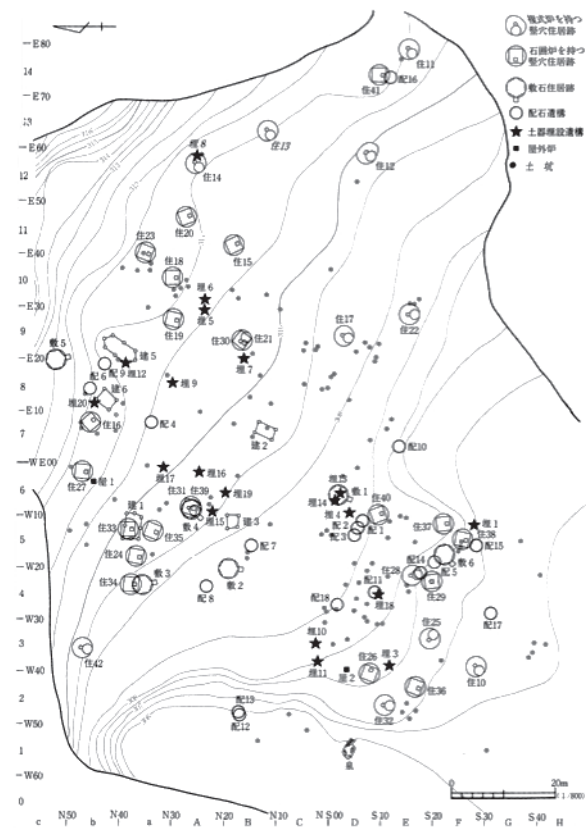


図2 越田和遺跡の遺構図

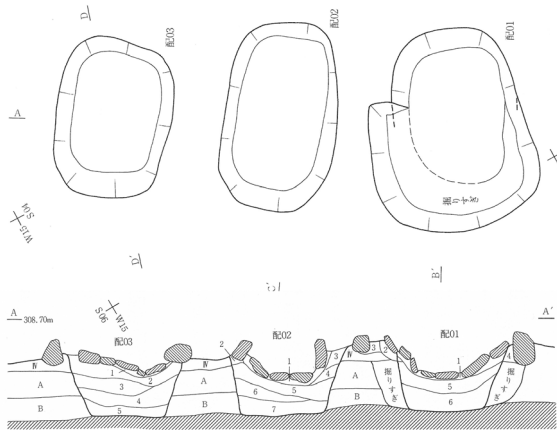


図4 越田和遺跡1、2、3号配石墓

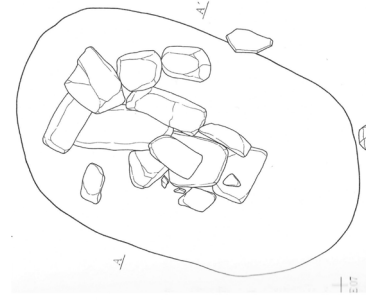


図5
越田和遺跡
4号配石墓

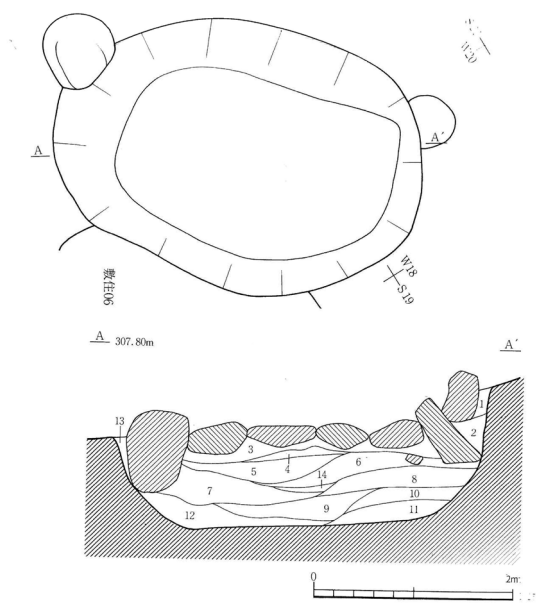


図6 越田和遺跡5号配石墓

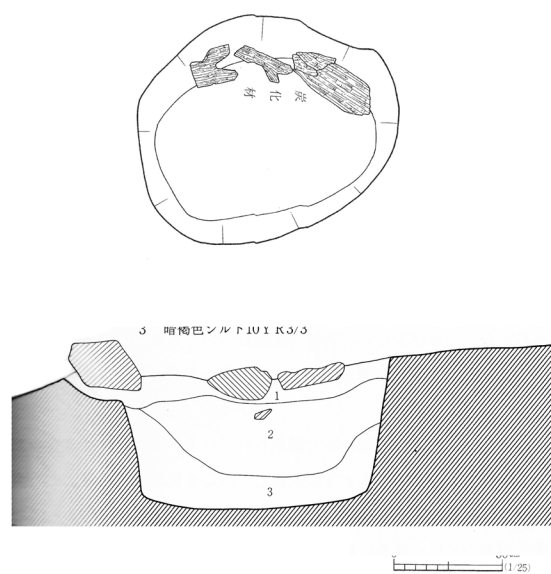


図7 越田和遺跡6号配石墓

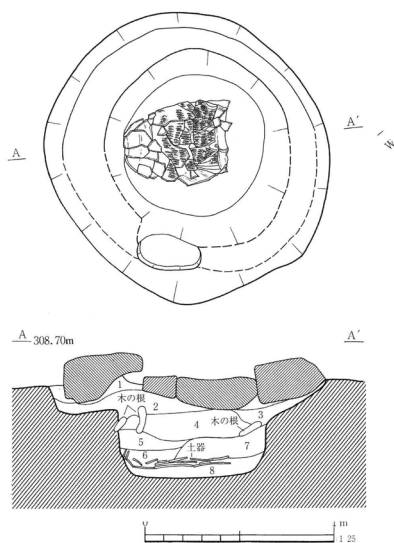


図8 越田和遺跡8号配石墓

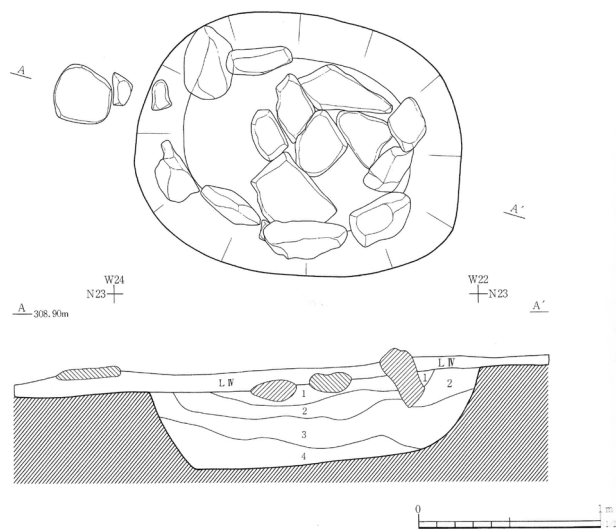


図9 越田和遺跡8号配石墓

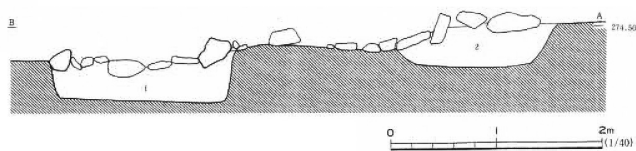
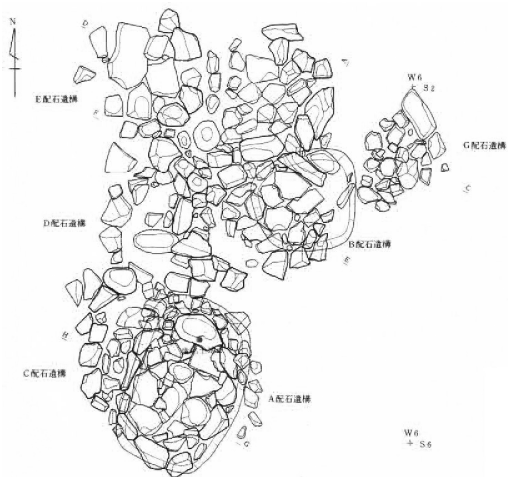


図10 西方前遺跡4群AB配石墓

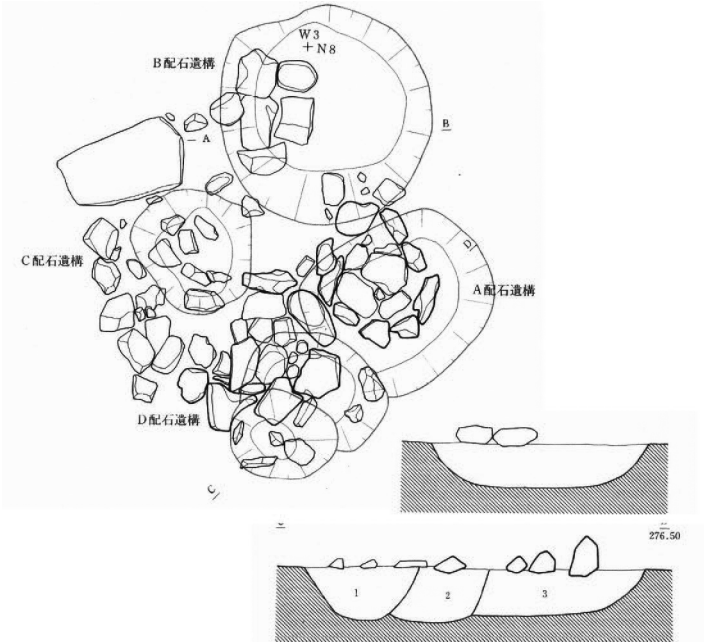


図11 西方前遺跡5群AB配石墓

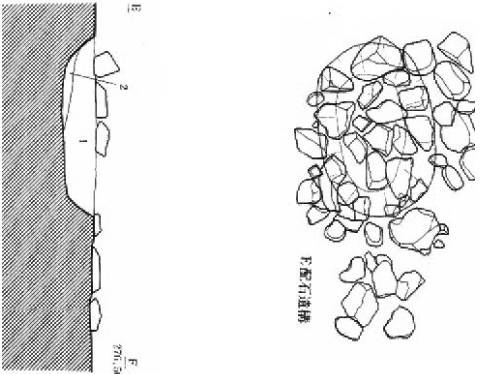


図12 西方前遺跡5群E配石墓

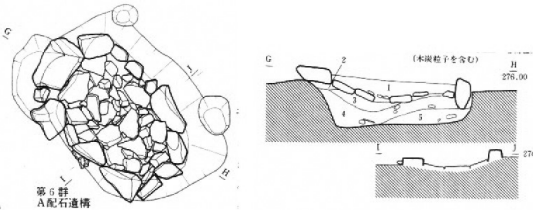


図13 西方前遺跡6群AB配石墓

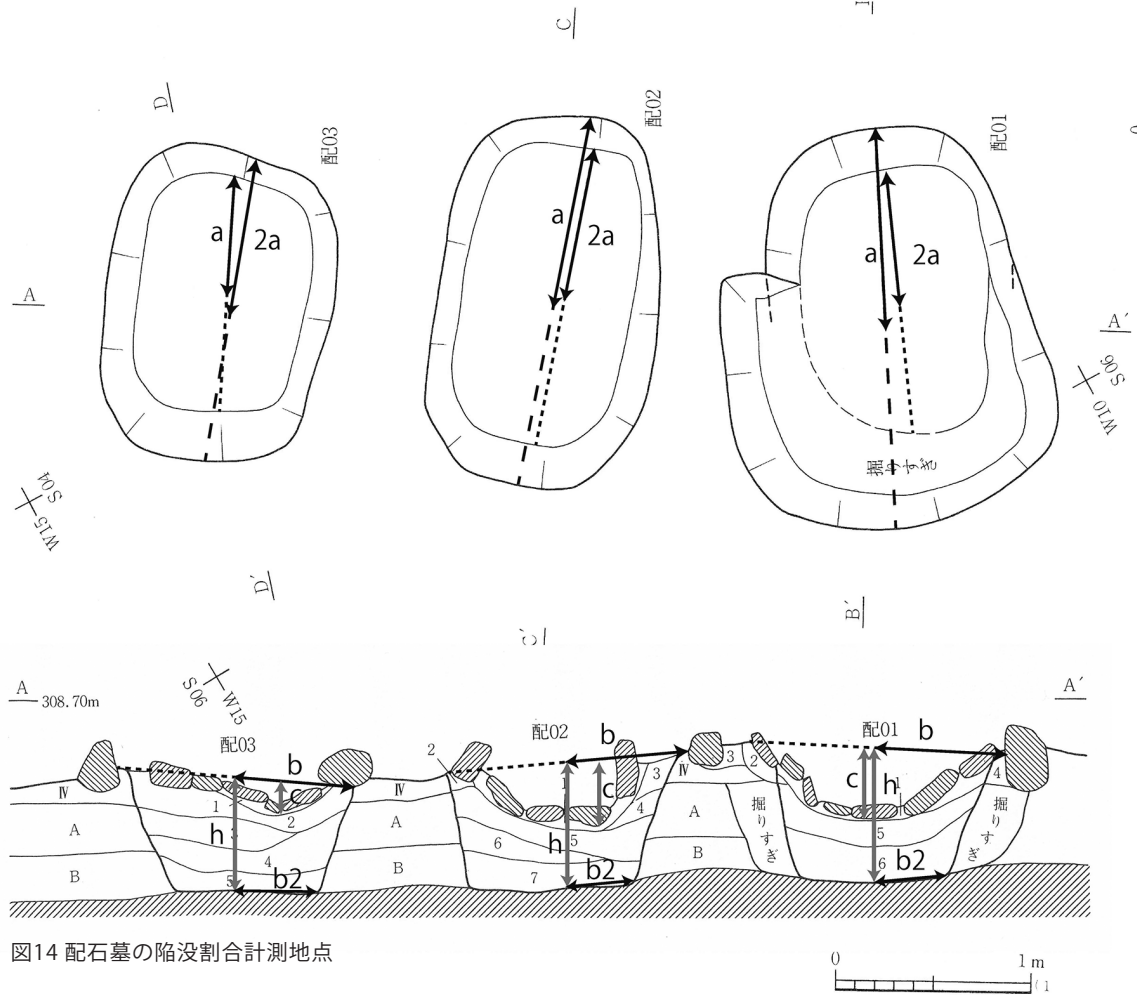


図14 配石墓の陥没割合計測地点

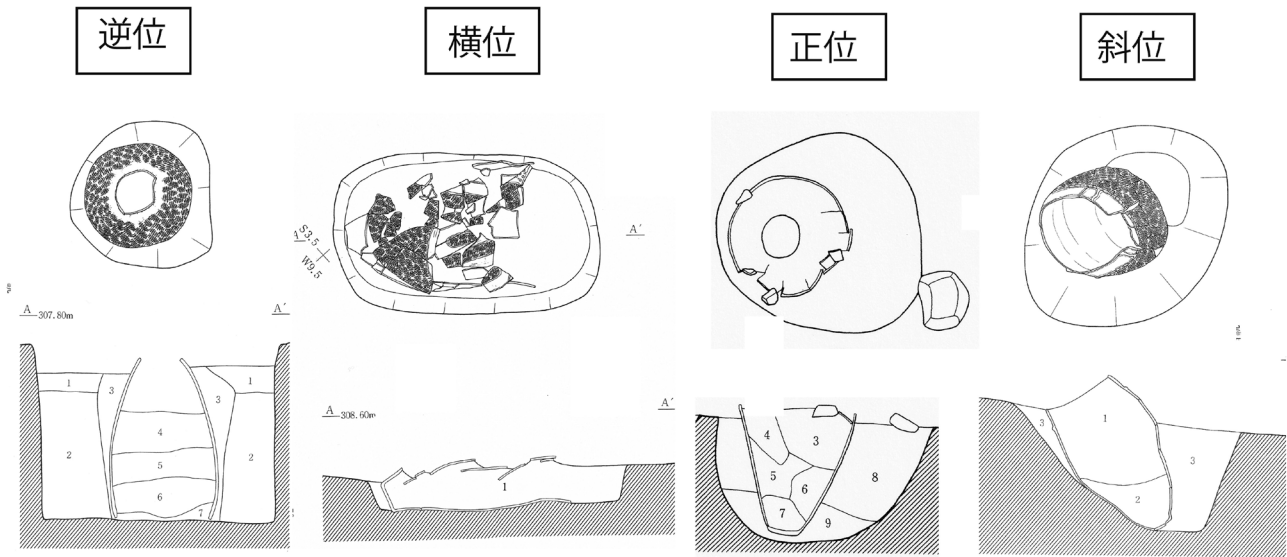


図15 土器棺墓の設置方向

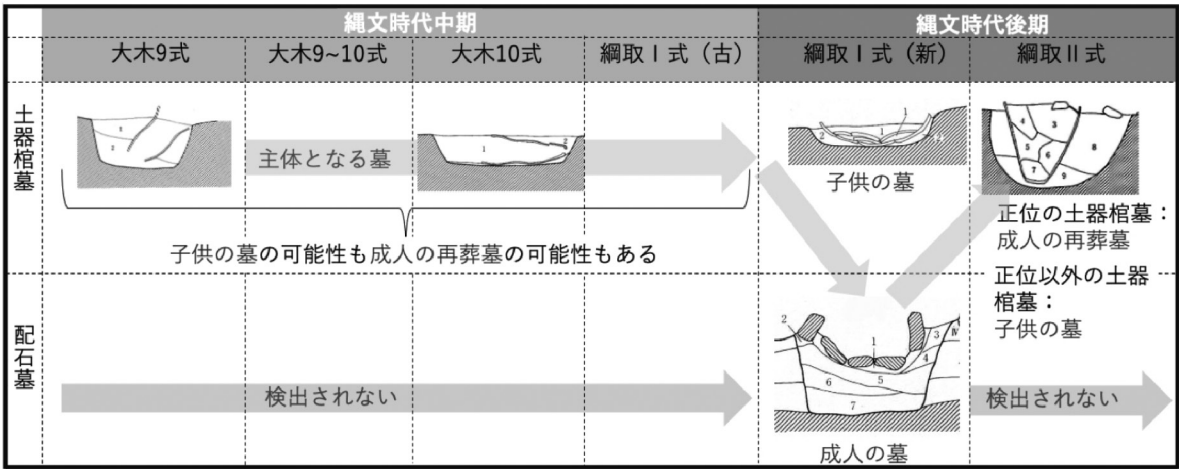


図16 墓制の変遷図

表1 越田和遺跡配石墓の陥没割合

配石墓 番号	船底型 凹体積	a 長半径 (m)	b 短半径 (m)	c 陥没深 (m)	a ₁ 口縁部 長半径 (m)	b ₁ 口縁部 短半径 (m)	a ₂ 底部 長半径 (m)	h 土坑深 (m)	陥没 容積 (m ³)	土坑容 積(m ³)	陥没 割合 (%)
1号	○	1	0.65	0.74	1	0.65	0.68	0.82	1.01	1.20	46
2号	○	1	0.75	0.66	1	0.75	0.76	0.6	1.04	1.10	46
3号	○	0.8	0.6	0.54	0.8	0.6	0.64	0.6	0.54	0.74	27
4号	○	1.05	0.65	0.04	1.05	0.65	1.275	0.4	0.06	1.05	5
5号	×	0.875	0.65	0.49	0.875	0.65	0.925	0.35	0.58	0.66	27
6号	○	0.62	0.5	0.465	0.62	0.5	0.6872	0.575	0.30	0.62	13
7号	○	0.775	0.7	0.44	0.775	0.7	0.5	0.65	0.50	0.76	15
8号	○	0.9	0.725	0.44	0.9	0.725	0.625	0.5	0.60	0.56	24

表2 西方前遺跡配石墓の陥没割合

配石墓 番号	船底型 凹体積	a 長半径 (m)	b 短半径 (m)	c 陥没深 (m)	a ₁ 口縁部 長半径 (m)	b ₁ 口縁部 短半径 (m)	a ₂ 底部 長半径 (m)	h 土坑深 (m)	陥没 容積 (m ³)	土坑容 積(m ³)	陥没 割合 (%)
4群A	×	0.98	0.64	0.02	0.98	0.64	0.86	0.44	0.02	0.77	0.03
5群A	×	1	0.168	0.016	1	0.168	0.5	0.36	0.005	0.11	0.05
5群B	×	0.88	0.84	0.016	0.88	0.84	0.24	0.32	0.02	0.33	0.07
5群D	×	0.42	0.36	0.02	0.42	0.36	0.34	0.4	0.006	0.16	0.04
6群A	○	0.88	0.88	0.16	0.88	0.88	0.66	0.36	0.25	0.15	0.38
6群B	×	0.56	0.42	0.04	0.56	0.42	0.42	0.24	0.01	0.14	0.14
8群A	×	0.68	0.52	0.04	0.68	0.52	0.56	0.24	0.02	0.22	0.13
8群B	×	0.42	0.32	0.04	0.42	0.32	0.3	0.2	0.01	0.06	0.18
11群A	×	0.72	0.46	0.06	0.72	0.46	0.42	0.2	0.04	0.13	0.31
11群B	×	1.26	0.98	0.08	1.26	0.98	1.12	0.24	0.20	0.83	0.25

表3 越田和遺跡土器棺墓の編年と設置方向












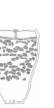











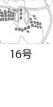














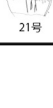
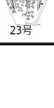



	横位	逆位	斜位
大木10式(新)	 4号		
網取Ⅰ式	 5号  7号  8号  9号  11号  16号  6号  12号  14号	 3号	 1号
網取Ⅱ式(古)	 10号  13号  15号		
網取Ⅱ式(新)	 19号		

表4 西方前遺跡土器棺墓の編年と設置方向

	横位	正位	斜位
大木9式(古)			 9号
大木9-10式	 6号  8号  15号		
大木10式(新)	 14号  26号  11号  16号	 48号	
網取Ⅰ式	 32号  10号  3号  1号  19号  35号  38号	 13号  25号  47号	 18号
網取Ⅱ式(古)	 2号	 24号	
網取Ⅱ式(新)		 22号  20号  21号  23号	 12号